
迷探偵ノブの探偵日記

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷探偵ノブの探偵日記

【Nコード】

N9508Y

【作者名】

白波

【あらすじ】

ここは地球と似ているけど少し違う星。この星で探偵をやっているノブのもと時々舞い込んでくる奇妙な依頼：ありとあらゆる事件を迷宮入りさせてきたノブはさまざまな謎を解くことができるのか？そもそもノブは探偵に向いているのか？

第1話 訪ねてきた旧友

ここは地球とそっくりな…でもなんだか違う星にある北大北王国^{ほくだいほく}の古都川府新川町^{しんかわまち}市の駅前^{ことがわ}に新しいビルに挟まれた五階建ての古びたビルがあった。

そのビルは一階から四階までがあいているがそのビルの最上階である五階には探偵事務所があった。

「暇だなー」

と言いながら椅子に座ったまま背伸びをしているメガネをかけて茶色い帽子など…典型的な探偵の恰好をした男はこの探偵事務所の近所である意味有名なノブこと探偵の坂町信孝^{さかまちのぶたか}である。

ノブが気分転換でもしようとコーヒーカップ片手に窓際に立つと窓の外を眺め

「相変わらずだな…。」

とつぶやくと机の上にあった砂糖と書かれた容器に書かれた容器に入ったものを大量に入れてコーヒーに口を付ける。

「なんじゃこりゃ！雪菜^{ゆきな}の奴砂糖の容器に塩入れやがったな！」

と言いながら流し台の方へ行き新しくコーヒーを作り直すとコーヒーカップ片手に窓際に立つ。そしてさっきのことなどすっかり忘れて砂糖と言う名の塩を大量に入れる。ふと下を見ると見知った人物がこのビルに入って行くのが見えた。このビルに入る人間は十中八九この探偵事務所によろがあるののでノブは身なりを整え始めた。

数分後ドアをノックされたためノブが

「どうぞ…」

と言うと先ほどビルに入ってきた短髪で肌が色黒の男が入ってきた。

「久しぶり！ノブ！」

と男が言うとノブは

「何年かぶりだな…どうしたんだ？お前がここを訪ねるなんて…。」
と話しかけた。

「ああ…ちよつとお前によろがあつてな…友人としてではなく…探偵としての…。」

と男が言うとノブは来客用のソファに腰かけるように促して男が腰かけたのを確認すると

「それで…話つて言うത്？」

とノブが聞いた。すると男は

「ノブ：俺は今からお前の友人の白壁大輔しろかべだいすけとしてではなくHHRの社員として言う…。」

と言った。

「お前：HHRに入社したのか？結構な会社に入社したんだな…。」
とノブが聞くと大輔は

「まあな…とはいっても本社の営業部の社員だけど…。」
と言うとノブは

「それで？」

と聞いた。

「実は…今度HHR二鳥主催ふたどりのイベントが行われるのだが…そのイベントで使う道具がなくなってしまったんだ…これが盗まれたものとは限らないから警察沙汰にするわけにもいかないし…そんな時ノブが探偵やつてた事思い出してここへ来たんだ…一応依頼料は用意している…。」

と言いながら封筒を差し出した。

「へえーそれで探し物って？」

とノブが聞くと大輔は

「それは向こうについてから話す…明日の10時に二鳥駅ふたどりまで来てくれ…くれぐれも遅れるなよ」
と念を押した。

「わかつてるよ…仕事には遅れないから…。」

とノブが言うと大輔は

「それじゃあ頼むよ…。」

と言いながら立ち上がる。

「待ってよ…久しぶりに来たんだからゆっくりしてきなよ！」

とノブが引き止めるが大輔は

「これからまた仕事なんだ…さっさと会社に戻らないと…それから一応言っておくがここから二鳥まで行くには古都こと新川町しんかわまち駅から急行の木古川きこがわ行きに乗って南国なんごく駅で普通電車の町田まちだ行きで町田まで行ってさらにそこから急行の二鳥行きに乗るんだぞ…わかったか？」

と大輔が言うとノブは

「まったく…複雑すぎる…もっとわかりやすく言えないの？」

と聞くと大輔は

「これが精いっぱいだ！」

と言うとそそくさと去って行った。

大輔が出て行った直後ノブの助手である東川雪菜あずまがわがやって来た。

「おはようございまーす！」

と雪菜が言うとノブは

「何がおはようございまーす！だよ…。」

と言った。

「どうかしたんですか？」

と雪菜が聞くとノブは

「どうもこうもお前砂糖の容器に塩入れただろ！」

と言った。

「あーあれですか…少し砂糖を控えた方がいいかなって…だってめちゃくちゃたくさん入れるじゃないですか…。」

と雪菜が言うとノブは

「いや…砂糖を大量に入れるより塩分が多量に入ったコーヒーの方が不健康だと思っただけど…。」

「そうですか？」

と雪菜が言くとノブは

「何今知ったみたいにあんなにふるまってるわけ？絶対知ってるよね！そんなことぐらい！」

と言った雪菜は

「そんなに文句言うなら塩はやめます…。」

と「塩」を強調していった。

「塩は…って何？砂糖にしてよ！頼むから！」

とノブが言くと雪菜は

「えーせっかく毒でも盛ろうかと思ったのに…。」

と残念がりながら言った。

「どこが残念なの…ってゆうかそんなこと考えてたの？」

とノブが聞くと雪菜は

「だって…何で私が助手なんですか？」

と聞いた。

「それは…俺の方が優秀だから！」

とノブが言くと雪菜は

「はいはい…そうですか…だったら一人でやってください…。」

と言って外に出ようとするがノブが

「待ってよ！俺一人にしないで！お塩たっぷりのコーヒーあげるから！」

と言ったが効果はなく雪菜は帰って行った。

第1話 訪ねてきた旧友（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

第2話 二鳥までの道のり

次の日ノブは探偵事務所から歩いて5分的位置にある古都新川町駅に来ていた。

古都新川町駅は7年前に設置された駅である。なお、この駅に止まるのは急行のみで特急はおろか普通や準急、快速なども止まらないというかなり変わった駅である。そのため駅の案内板には常に「急行 古都川」と「急行 木古川」という列車案内とその列車がそれぞれ到着する時間しか表示されていない。

ノブが一番ホームに立つとちょうど

『まもなく、一番ホームに古都川方面の急行古都川行きが10両で到着いたします…黄色い線の内側まで下がってお待ちください…この列車は新川町、古都川に停車します…』

と言うアナウンスと共にスカイブルーのラインが特徴的な列車が入線した。

『古都新川町です！この駅では乗り換えができませんので普通電車並びに特急などをご利用のお客様は次の新川町でお降りください！』

列車の扉が開くがこの時間帯はあまり乗客は多くないため通勤ラッシュの時のようにドツと人が降りてくることはない。ノブはこの列車に乗ると反対の方へ行っていることなど気づかず寝始めた。

ノブが目を覚ますと古都川駅に電車が到着したところだった。

「ここは…古都川！」

と言うとノブは電車から降りた。

（どうしよう…新川町ぐらいならまだしも古都川となるとな…仕方ない…特急に乗るか…。）

と考えるとノブは特急券の売り場へ向かった。

古都川駅は超がつくほどの巨大ターミナルでその巨大さゆえに古都川駅は四つに分けられておりHHR古都川の古都川本線の列車が発着する1～8番ホームが東駅、HHR二鳥の二鳥本線の列車が発着する9～16番ホームが南駅、HHR西宮にしのみやの西宮本線が発着する17～24番ホームが西駅、そして、HHR釜梨かまなしの釜梨本線が発着する25～32番ホームが北駅と呼ばれている。古都川駅の東西南北のホームや駅ビルの行き来は主に連絡通路を使う。ただ四つの駅は名前こそ一緒だが結構離れているためこの駅で乗り換えをする際はかなり余裕を持った方がいいらしい。四つの駅がこれほどまでに離れている理由は諸説あるが一番有力なのはこの駅は国鉄時代にできた駅なのでお金が足りなかった。と言うものである。

話がそれってしまったがともかくノブは南駅の時刻表を見るためにホームの中ほどまで行った。時刻表によると今から10分後に特急なつかぜの夏風3号が発車すると書かれていた。

（でもこれだとずいぶん早いな…いや…さてよ…確か3号には…。）
と考えながら夏風に併結されている春風3号はるかぜの車両案内を見る。

（やっぱりそうだったか…だったら春風に乗って町田で急行に乗ればぎりぎり間に合うな…。）

と考えながらノブは夏風・春風3号が止まる12番ホームに向かった。

12番ホームへ来ると増結用の2両編成の電車がすでに止まっておりノブはそれに乗った。この春風3号はHHR二鳥の特急で唯一特急料金がいらぬ一般車が連結されている。夏風と春風は町田いっせきまで併結して運転し、町田で切り離して夏風は一石、春風は春電桜川はるでんくらがわへとそれぞれ向かう。

そのあと連結作業を完了した夏風・春風はディーゼル独特のエンジン音を地下空間に大きく反響させて出発した。

しばらく複雑線だったが普通電車や準急、快速などが走る路線は地下のままで特急と急行が走っている真ん中の2線のみが地上へ出る。実はこれが古都新川町駅に普通電車や準急、快速が止まらない要因である。古都新川町駅を設置したそもそもの目的は特急のスピードアップのために新川町と古都町永ことまちながの間に急行が待避するための駅が必要となった。その結果設置されたのが古都新川町駅である。しかし、普通電車などが走行する地下にまでホームを作ると多額の金がかかるためこの駅は地上のみで急行が停車する停車線と特急が通過するための通過線に分かれている新幹線の間駅を思わせるような構造の駅が地上に作られるのみとなったのである。

そんなことを語っているうちに列車は古都新川町駅の通過線を通り次の通過駅の古都町永まで減速せず一気に進んでいく。

それからしばらくすると列車は車両基地がある南国駅のホームへ滑り込む南国駅から町田駅の間はたった一駅なのだが非電化区間なので特急列車を除く古都川発の列車は南国駅で終点か電化されている木古川線に入る。

その後非電化区間を抜けた先にある町田駅に着くとノブは特急から降りて向かい側に停車している急行二鳥行きに乗り換える。

ここからは早いものである。急行は多くの停車駅に止まったがあとと言う間に終点の二鳥についた。

何とか10時になる前に二鳥駅に着いたノブはホッと胸をなでおろし町田駅で急行に乗った時からずっと後ろについてくる人影にな

ど気づかずに改札口へと向かうのだった。

「まったく：本当に探偵なのかしら：自分が尾行されているのに気付かないなんて：。」

などと言いながら後ろの人物も隠れながらこそと歩いてゆくのがあった。

第2話 二鳥までの道のり（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

説明ばかりですいません…。

これからもよろしくお願いします。

第3話 探し物とは？

ノブは二鳥駅の改札口で待っていた大輔を見つけてそっちの方へ歩いて行った。

「わざわざ悪かったな…遠かったろ？」

と大輔が言うとノブは

「まったくだよ…二鳥本線を全線電化した方がいいんじゃないか？」
と言った。

「確かに二鳥本線の南国と町田の間が電化されてないから二鳥本線は主に古都川の南駅から南国、南国から町田、町田から二鳥…と言う感じになってるが電化して急行や普通が直通運転しても需要は少ないからね…特急が直通するだけならこのままの方がいいんだよ…。」

と大輔が言うとノブは

「そういうもんなのかな？」

と言いながら歩き出す。

「そういうものだよ…あとそっちは出口じゃないぞ！」

と大輔が言うとノブは

「い…いや…トイレにでも行こうかなって…。」

と苦し紛れに言うが大輔が

「トイレもこっち側だ！」

と言いいいながら反対の方に歩き出さす。

「あーそうなんだ…とにかく行こうか…。」

と言うとノブは大輔に続いて歩きだした。

二人はH H R二鳥本社と書かれた看板が立っているビルの前に立った。

「結構立派だな…。」

とノブが上を見上げながら言う和大輔は

「まあ、HHRのビルは基本的に国の出先機関のビルだったからな
：どれも規模が大きいよ：まあ持て余して売却して小さいビルを建
てるところもあるけど：。」
と説明して中に入って行く。

その二人を追う人物は

「まったく：久しぶりの仕事だから学校サボってきたんだ：ちゃん
と探偵らしくしてよ：迷探偵さん：。」
と言うと本社ビルに入って行く。

応接室に通されたノブは大輔に

「そろそろ教えてくれない？探し物がなにか？」
と聞いた。

「ああ：そうだな：それならそっちにこそそそという方に出てきて
もらおうか：。」

と大輔が言うのと物陰から雪菜が出てきた。

「雪菜！お前学校じゃなかったのか？」

「私はまだ小学生だし：一日ぐらい：。」

と雪菜が言うのとノブは

「そういう問題じゃねーだろ：。」

と言った。

「助手だったのか：ていうか小学生なの？その子：。」

と大輔が言うのとノブは

「まあな：やることは全然小学生らしくないけど：。」

と言った。

「そうなのか：とりあえず探し物と言うのは：今度のイベントで使
う大道具なんだけど：。」

と大輔が話し始めるが雪菜が

「ねえ：これってどうやって解くの？」

と言いながらノブに算数の問題集を出す。

「九九か…まずは…。」

とノブが言う。と雪菜が

「ねえ…七の段言える？」

と聞いた。

「もちろんだよ！なんたって俺は大人だから！」

とノブが言う。と雪菜が

「じゃあ…言って今すぐ！」

と言う。

「よし…行くぞ！ $7 \times 1 \parallel 7$ 、 $7 \times 2 \parallel 14$ 、 $7 \times 3 \parallel 21$ 、 $7 \times 4 \parallel 28$ …ほら！すごいだろ！」

とノブが言う。と雪菜は

「すごい！」

と言う。

「お前らなに勝手に和んでるの！今重要な話してるの！しかも九九間違ってるし！ $7 \times 4 \parallel 30$ だしそれより先は？」

と大輔が言う。とノブは

「えっ！全部言わなきゃいけないの？」

と聞いた。

「まったく… $7 \times 4 \parallel 28$ でしょ…その先は…めんどくさいから言わないけど…。」

と雪菜が言う。と大輔は

「なんなのこの子？急に性格変わったよ！」

と言った。

「そんなことはいいとして…探し物はなんだよ？いい加減に教えてくれないと探すものも探せん…。」

とノブが言う。と大輔は

「だからな…さっきも言ったように探してほしいものは今度イベントで使う大道具なんだ…。」
と言った。

「大道具って言うってどんな？」

「実はこのイベントではヒーローショーも行うんだが…そこで使う…。」

「そこで使う？」

「むちとロウソクだ…。」

と大輔が言うとノブは

「どんなヒーローショーやろうとしてんだ！そもそもそれ小道具でしょ！大道具じゃないじゃん！消えた大道具事件じゃなくて消えた小道具事件でしょこれ！」

と言った。

「いや…魔法少女カカラインのショーなんだが…。」

と大輔が言うと雪菜が

「カカラインでそんなものいらないと思うけど…。」
と言った。

「えっ！別にアニメとか原作とか見てないけど…そういうの使うんじゃないの？悪役が…。」

と大輔が言うとノブは

「カカラインはそんなアニメじゃねーよ！いろいろな形の杖があっただろ！」

と言った。

「それは全部捨てた。必要ないと思って…。」

と大輔が真顔で言うとノブは

「それが一番重要でしょうが！それなくしてどうするんだよ！」
と言った。

「そんなこと言ったていまどき魔法少女が出てくるようなアニメなんてないだろ？」

「タイトルに思いきり魔法少女って書いてあるだろうが…。」

とノブと大輔がやり取りをしているのを見て雪菜は

「とにかく…むちとロウソクより先に捨てちゃった杖どうにかしない…。」

と意見を述べた。

「それもそうだな…まったくそんな重要なものを捨てたのは一体誰だ！」

と大輔が言うと二人は

「「お前だろうが！！」」

と言った。

「そんなことより…どこから探せばいいかな？」

と大輔が聞くとノブは

「いつ捨てたんだ？」

と聞いた。

「今日の午前中だ…。」

と大輔が答えると雪菜が

「ごみはいつ回収されるの？」

と聞いた。

「今から1時間後だ…。」

と大輔は答えた。

第3話 探し物とは？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9508y/>

迷探偵ノブの探偵日記

2011年12月3日21時46分発行